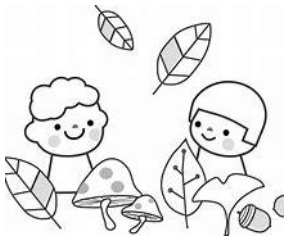

「反省させる」では重ならないこと

園長　野中　泉

『反省させると犯罪者になります』こんなショッキングな題名の本があることを、ほんの数週間前に友人に教えてもらいました。そんなバカなと、今そう思いながらこの巻頭を読んでいる人もいるかもしれません。かくいう私もそう思っていたひとりです。けれど、長年重大犯罪の受刑者更生支援という仕事をされてきた筆者の（現場の実感と重みのある）その言葉は「悪いことをしたら反省させなければいけない」というのは、本当に疑うことのない一般常識なのか？と私たちの凝り固まった『当たり前』を、まっすぐに問い直してきます。

うちの 26 歳になる次男は、小学生の頃、学校では、なかなかの「問題児」でした。反省文というものも何度も書かされていましたが、一度、親子で反省文を出さなければいけないということがありました。（これには、なぜ？と今でも首をかしげてしまいますが）担任の先生から自宅に電話があり、「息子さんがお友だちに水たまりにはいることを強制しました。これは、放っておいてはいけないいじめです」というような内容を聞かされたと記憶しているのですが、電話口では「それは、申し訳ありませんでした」とお詫びしたものの、それについて母親である私はいったいなんと反省文を書けばよいのか、途方にくれてしまいました。仕方なくこっそり寝ている息子のランドセルを開けて彼の反省文を読んでみました。「ぼくも、とっても楽しかったし、フジカワ君も一緒に笑っていたので、楽しいのかなと思っていました。それがいけなかったなら、ほんとうにごめんなさい」その反省文を読んだ時の、なんとも言えない気持ちを、忘れられない文面と共に今でもときどき思い出します。フジカワ君は、近所の子で、東京から福井に引っ越していった息子とすぐに友だちになってくれた優しい子です。その前も、その後もよく一緒に遊んでいました。子どもたちの真相がどうであったのかは、その場にいなかったのでわかりません。でも少なくとも、うちの息子が、よくわからないけど書けと言われたから反省文を書いたにすぎないことだけは、よくわかりました。

前述の本の筆者は、ショッキングな書き出しの後にこんなふうに続けています。「悪いことをして、何度も反省させられて、最後に犯罪を犯してしまう者の「代表者」が受刑者です。～中略～長年、受刑者の更生を支援するなかで分かってきたことは彼らを更生させるためには「反省させてはいけない」ということです。私は、彼らに反省を求めません。反省を求めない方法で個人面接や授業を進めていくうちに、彼らの多くは反省していきます」つまり、筆者はただ単に周囲が反省を求めることは、ほんとうの反省につながりますか？と問うているのでしょう。もっと言えば、即時に「反省」を求めると、彼らは「世間向けの偽善」ばかりを身に付けてしまうとばかりで、逆効果だと言っているのです。

「アトムはけんかを止めない」というような言われ方をよくします。私の代になってからはありませんが、前園長からは「けんかを止めないとはけしからん」とお叱り（苦情？）の電話が近隣の年配の方からかかってきたこともあると聞きました。私自身は、子どもたちのけんかに立ち会うアトムの大人たちを見ながら、「けんかを止めない」ではなくて、すぐに大人が善悪で裁いたり、頭ごなしに反省を促したりしないということだけだと思っています。それは、めんどうで時間のかかるやり方です。でも、そのめんどうな時間の中で、子どもたちは他者を手鏡に「内なるやっかいな自分」と向き合っていきます。自分の頭で考えていくのです。誰かに言わされた表面的な「ごめんなさい」を百回重ねるより、ずっと大事な心のひだが、そんな体験で重ねられていくと信じています。

引用：新潮新書『反省させると犯罪者になります』　岡本茂樹著